鶴見文化財学会報
Tsurumi Cultural Properties A.C

vol.5
2004年3月25日発行
鶴見大学文化財学会

学問と多面体

大三輪　龍彦

「少年老い易く、学なり難し」まことにそのとおりである。特に、学問を大成することは難しい。日々、学問と向き合って久しいが、自分の学問に満足したことは皆無である。よく、物事は多角的に見なければならないといわれるが、これはどういうことなのだろうか。学問を目指す者であれば、多かれ、少なかれ知的好奇心は持っているものである。何にでも興味を持つことは決して悪いことではない。しかし、それは、ともすれば、間口を広げる方向に進んでしまう。

学問にとって、間口を広げることは、必ずしも有効な手段であるとはいいがたい。間口を広げれば物知りにはなる。しかし、それは学問の本質からは遠ざかることはあっても迫ることにはならない。知的好奇心は物事を見るための面を増やすために活用すべきである。面を増やすと言うことは、入口を広げるのではなく、入口を数多く持つということである。それぞれの入口を通して物事を見たとき、それらが交わったところに本当の姿が見えてくるのではないだろうか。

ところで、研究者が、多くの面を持った多面体になれればいいのだが、それにも限度があるだろう。しかし、研究者であれば、多面体を目指すべきである。文化財学科もこうした理念で生まれた。歴史・地理、考古・美術、文化財の三系列を学科内に置き、全ての系列について学ばせるのも、多面体としての研究者を目指す一助としたいからである。その上で、一系列を選んで更に深く学ぶことによって、専門性を高めることとなる。

鶴見大学文化財学会は、文化財学科で一系列を専門的に学んだ卒業生、現在学んでいる学生、大学院生と教員によって構成されている。まさに多面体の学会であるといえよう。こうした学会の特性は、多様な研究テーマを持つことを可能にしている。学会の中にはさまざまなテーマによって、研究部会が結成されている。部会はそれぞれで、多数の部会員を擁して、活発な活動をしている部会もあれば、部会員不足で十分な活動ができない部会もあるが、なんといっても活発に活動しているのだが、後継者の育たない部会については、今後の継続が心配である。こうした研究部会活動は、継続することによって目的を達成することができるといえよう。後継者の養成が望まれるところである。また、多くの目で事の本質を見極めるという考え方からすれば、なるべく多くの会員が、研究部会活動に参加すべきであると考える。

さて学会も今年で五年目を迎えるが、そろそろ、研究の成果を社会に広く発信することを考えねばなるまい。研究の成果を公表することによって、普遍化を図ることが必要である。そのためには、学会誌の刊行を考える時期になったのではないだろうか。会誌も亦継続することが、重要である。十分な検討と、準備が必要であることはいうまでもない。今年を学会誌刊行へむけての、第一年目としたらどうであろうか。

ところで、発会当初から、会長を務めさせていただいてきたが、六月の総会で交代することとなった。永年にわたっての会員の皆様の、ご協力に感謝するとともに、学会のますますのご発展と会員諸氏のご活躍を祈るものである。

学会とは何？

永　田　勝　久

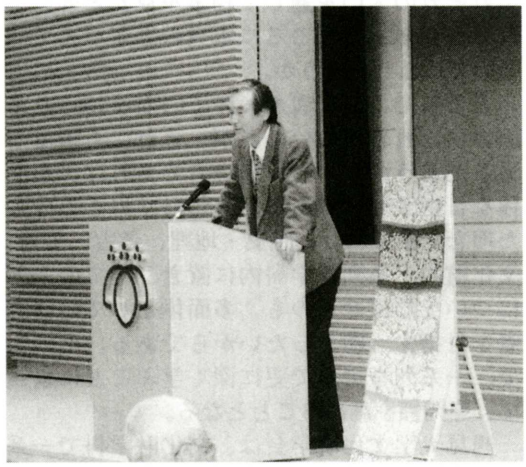
鶴見文化財学会報の編集委員から、学会報に何か書いてほしいと依頼を受けた。この手の文章を書くのを大の苦手とする私としては、即座に断ったが、即座に、ほとんどの先生は既にお書きになっておりますとの答えが返ってきた。仕方がなく、何について書けばいいのかなと尋ねたところ、それは先生の自由ですとのつれない答えがまたまた返ってきた。そこで覚悟を決め、テーマを決めてもらったほうが書きやすいなと思いつつ、既に発行されている学会報を再度読み直してみた。何について書こうかなと思いつつ、読んでいると、最後のページに学会の会則が載っていた。それを読みつつ、文化財学会について思いついたことを書くことにした。

鶴見大学文化財学科は、東日本で初めての学科として、平成10年４月に開設され、平成14年３月に学部第１回生を送り出した。同時に、４月、大学院の前期・後期博士課程、文化財学専攻科を開設し、そして今年３月に前期課程（修士課程）の第１回生を送り出すことになっている。また、来年（平成17年３月）には後期課程（博士課程）の第１回生を送り出す予定である。この様に現在のところ鶴見大学文化財学科は、教育並びに研究とも順調に発展しつつある。

鶴見大学文化財学会もまた、平成11年10月16日に発足して以来、春季の講演会、秋季のシンポジウムの開催など様々な活動を行い、発展していることはすでに皆さんはご承知の通りである。これはひとえに、学会委員、特に学生委員の諸君が熱心に活動しているからである。しかしながら、一般の学生はさほど学会に興味があるとは思われない。特に２、３年の学生の出席率がここ１、２年少ないように思われる。

昨年の秋季学会は、「国指定史跡永福寺跡―鎌倉寺院跡の多角的検討―」と題してのシンポジウムが開かれたが、従来と多少異なった形で開催された。それは文化財学専攻科の大学院生が、今まで研究してきた研究の一端を研究報告したことである。このことは、私は望ましいことと考えているが、学会のあり方また学会誌の内容には様々な形があって当然だろう。

本学会をさらに発展させるためには、学会のあり方について、学会員一人一人が考えなければならない問題である。また、学会誌の発行に向けて着々と準備が進められており、近々発行される予定であると聞いている。学会誌の内容などを含め、皆さんも再度学会の会則を読み直し、本学会が、その目的を達成し発展するためには、どの様なことをしなければならないか一度考えてほしいと思う。本学会のさらなる発展を祈って。



文化財学会
春季・秋季大会関連報告

〈春季大会〉
講演「鎌倉大仏について」

報告　2年　高野　茜

平成15年度文化財学会春季講演は、6月7日土曜日に行われました。今回の講演では「鎌倉大仏について」と題し、京都大学名誉教授でいらっしゃる上横手雅敬先生をお招きし、ご講演いただきました。

はじめに、鎌倉大仏の造立過程について述べられました。造立過程については不明な点が多く、鋳造開始時期は分かっているものの、完成時期については諸説あり、そのなかから、清水真澄氏や馬淵和雄氏、塩沢寛樹氏の説についてご自身の考えも交えながら述べられました。

続いて、東大寺大仏と鎌倉大仏を比較し論じられました。両者の共通点として勧進が行われたことを挙げ、勧進の意義について当時はどのように考えていたか、ということについて話されました。そのなかで、仏像は最初から勧進のお金でつくるという考えが基本にあったのではないか、また、両者の結縁についても言及されました。東大寺の結縁については再建のとき行われた記録が残っていますが、鎌倉大仏の結縁の記録は残っていません。しかし、弘長2年2月27日から8月初めにわたる叡尊の鎌倉下向は、鎌倉大仏への結縁と少なからず係わり合いがあったのではないかと述べられました。

次に、「東関紀行」にある木造八丈の仏像は金銅像の原型であったのか、ということについて話されました。ご自身が以前述べられた「関東大仏が東大寺大仏に対抗しようとする限り、木像ではあり得ず、東大寺同様に金銅像でなければならなかった。木像は暫時の仮説であり、当初から究極的には金銅像の制作が企図されていた」との説は根拠薄弱であるが、途中からにせよ金銅仏にしたのは幕府の意力が感じられ、東大寺（朝廷）に対する対抗意識がうかがえると述べられました。

次に、鎌倉大仏とほぼ同時期につくられた京都の東福寺大仏について論じられました。東福寺は摂政九条道家によって嘉禎2年（1236）に、五丈の釈迦像を安置し、国家の安寧、君臣の寿福を祈ることを目的に建てられ、また、朝廷のための鎮護国家の寺（東大寺）と藤原氏長者以下一門を守る氏寺（興福寺）を合わせた意味で東福寺と名づけられました。しかし、この寺の造寺は九条家によってのみ行われ、本質的に九条家の氏寺を超えるものではなかったと指摘されました。さらに、東福寺大仏は木像で、勧進や一般人の結縁の問題などは権門九条家の寺なので生じなかったことから、権門的な東福寺大仏と超権門的な鎌倉大仏は同一に論じることができないと述べられました。

続いて、権門体制論と東国国家論についてご自身の考えを述べられました。先生は、長い間中世史で論じられている二者択一ではなく、両者を総合した立場がよいのではないかと述べられました。

最後に、残された問題として、大仏殿は建築名ではなく寺院名ではないのか、叡尊は北条時頼の依頼で後嵯峨上皇に接近したのか、律の朝廷への進出の問題等を挙げられました。

「鎌倉大仏について」という今回の講演は、文化財学科に所属する私たちにとって馴染み深く、興味深い内容であったと思います。最後になりましたが、このように貴重なご講演を賜わりましたことを上横手先生に感謝申し上げます。

〈秋季大会シンポジウム〉
「国指定史跡永福寺
—鎌倉寺院址の多角的検討—」

報告　3年　小坂　康人

平成15年度文化財学会秋季シンポジウムは「国指定史跡永福寺—鎌倉寺院址の多角的検討—」と題され11月15日土曜日に開催されました。

はじめに基調講演として本学教授の大三輪龍彦先生が「永福寺の沿革」と題して講演をなされました。その中では、永福寺の創建から衰退に至るまでの流れを、年表を交えポイントをおさえながらの解説がありました。

続いての関連報告では6人の方々に発表をしていただきました。

最初に、本学講師で建築史が御専門の鈴木亘先生に「発掘遺構から建物を復元する—永福寺二階堂の復元的考察—」という論題で発表していただきました。はじめに、文献資料に見る永福寺二階堂の記事から、二階建ての堂の例、裳層付仏堂の例の紹介をしていただきました。次に発掘調査による永福寺二階堂の遺構から二階堂の復元をされ、何点かの復元案を紹介し、考察を述べられました。

次に、本学助手である福田誠先生に「経塚出土遺物を探る『幻の扇』」という論題で発表していただきました。福田先生は、永福寺経塚から発見された扇について、扇の出土状況や経塚出土遺物の年代観、さらに絵巻に描かれている扇などから、この扇が「皆彫骨扇」の現存する最も古い資料であると述べられました。

続いて、本学教授の中里壽克先生より「永福寺出土螺鈿遺品の螺鈿史上における位置」という論題で、永福寺出土螺鈿遺品を12世紀の螺鈿資料の内で比較され考察を述べられました。発表では、永福寺から発見された計8点の遺品が藤末鎌初の螺鈿の歴史を補う大変貴重な史料であると結論付けられました。

引き続き、本学大学院文学研究科博士前期課程2年の五十嵐健太さんから「永福寺出土螺鈿燈台の復元」と題し発表がありました。五十嵐さんは、永福寺出土螺鈿遺品の1つ「黒漆地螺鈿燈械残欠」から復元を兼ねた研究調査を行われ、その結果永福寺螺鈿燈台が中尊寺螺鈿燈台よりも約30cm高いこと、製作時期が寿永2年（1183）前後頃から正治元年（1199）或は弘安3年（1280）までが妥当ではないかと考察されました。

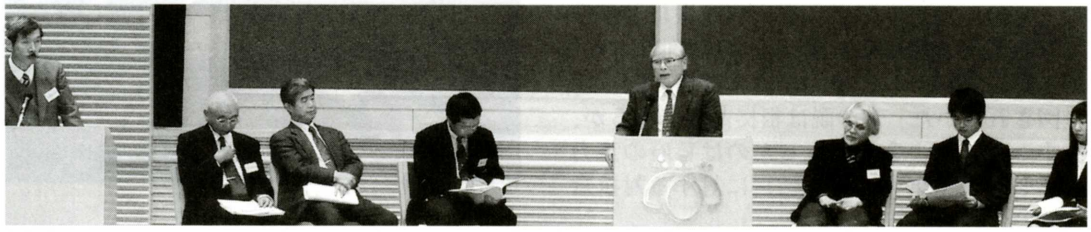
次に、本学大学院文学研究科博士前期課程1年の長友純子さんから「胎土分析からみた永福寺瓦の産地」という論題で、永福寺出土の瓦の分析結果から尾張産ではないかと考えられている男瓦C類と女瓦F類が尾張産のグループに属すること、水殿瓦窯産ではないかと考えられている瓦がその可能性が高まったこと、さらに在地産と考えられている瓦がその可能性が高まったことなど、従来の学説を補完する発表をされました。

そして最後に、本学前学長で總持寺宝物殿館長の納冨常天先生に「初期永福寺の仏教思想」と題し発表していただきました。お話では、鎌倉開府初期の鎌倉を中心とした仏教の動向、源家と園城寺の密接な関係などから、初期永福寺における仏教思想の動向は天台宗寺門派の台密を中核にするものであり、また、永福寺が鎌倉時代の仏教発展期における先駆的地位にあったとお話されました。

シンポジウムの最後に、講演者の方々に会場からの疑問・質問にお答えいただき、秋季シンポジウムは盛況のうちに幕を閉じることとなりました。

現在、国指定史跡である永福寺では国有地化が進み、指定面積の約80%が国有化され着々と史跡公園化に向けて前進していますが、文化財保護行政はいまだ厳しい状況にあり、これらの貴重な文化遺産をどのように後世に伝えるのか我々は考えなければならないでしょう。そのためには、今回のようなシンポジウムで多くの人たちの理解・協力を求める必要があると感じました。

また、今回のシンポジウムでは、文化財学科の学生が初めて報告を行いました。このことは、文化財学科において、非常に喜ばしいことでもあり、気を引き締めなければならないことです。学生が発表することは、文化財学科の評価に直結することを我々学生は認識しなければなりません。そして、このことが文化財学会において大きな一歩であることは間違いないでしょう。



学会　左見右見

一年生を終えて

1年　竹内　千冬

1年という長いようで短い時間の中で人はどれだけ成長できるでしょうか。身長や体重など体の成長は伸びたり縮んだり、増えたり減ったりする事で見て分かりますが、心の成長は見る事ができず、分かりにくいのです。

“大学に入れば今より少し楽が出来る”と受験生の頃私は考えていました。簡単に言えば、大学に入学する事が1つの節目、人生のゴール地点だと考えていたのです。しかし、その考えは甘かった事が怒涛のような1年を終え振り返った今、理解することができました。1つの節目が終れば、それはもう次のスタート地点なのです。高校が“学業のゴール”であり、大学は“研究又将来へのスタート”なのだと思います。

春は土・日にかけて文化財研究法の課外授業で栃木県の日光東照宮へ学びに行ったり、鎌倉を巡検したりと、休みもなくレポートに追われていたように思います。

夏は、休みに入る直前の必修や履修授業のテストに頭を痛め、秋は休み前に出されていた課題に慌てふためきました。そして、冬は短い休みを終え、必修のテストに備え、およそ1ヵ月間テストを受けたような気がします。

入学し、もう1年が過ぎました。時間を気にできないくらい、充実した1年だったと思います。1年生と2年生の間の期間、現在は曖昧な立場にいますが3年次から始まるゼミなどを考え、自分がこの学科に入り何をしていきたいのかを考える時だと思います。

学会について

2年　岡部　憲治

私の文化財学会に対する意見は学会の運営についてである。学会は年に2回、シンポジウムを開いているから活動しているのは伝わる。しかし、皆に「学会とは何か。」という本質的な事は伝わっていないと私は思う。その為シンポジウムは「何かやっている。」という感じがしてしまう。そして自分も含め、多くの人が文化財学会員である自覚が薄いという事もあって、文化財学会の存在が文化財学科に所属している全ての人に浸透していないという事がいえる。だから学会を運営していく上で物事がうまく進まないだろうし、これから学会が発展していくのは難しいのではないだろうか。そこで1つ提案があるのだが、文化財学会の会員証を作ってみるのはどうだろうか。そうすれば否応なしに文化財学会に所属しているという自覚がつくのではないか。しかし、この提案は少々強制的な感じもする。ただ、文化財学会がどの様な存在であるかを会員に伝える事が必要だと私は思う。

また、個人的な意見であるが、我が学科は勢いが無いと思う。それは多分、私を含め多くの人が文化財学科で自分はこれが本当にやりたい事が見付からないからかもしれない。私は文化財について一生懸命勉強に励んでいるとはいえないので人に説教する事は失礼なのだが少し言わせて欲しい。もし、これがやりたいという事がある人は、今しかできないのだから思い切ってやりたい事をやってみたらどうだろうか。

学会と学生にもっと繋がりを

3年　能代　翔太

学会の活動を外から見たらどうなのか？ということについて、私の目から見た学会の活動を述べたいと思う。学会委員の活動と聞いてまず思い起こすのは級友たちが慌しく駆けまわっている姿…とも言えるぐらい、特にシンポジウム前の学会委員の多忙さには目を見張るものがあった。委員長を筆頭に学会委員それぞれが真剣な気持ちでこのイベントに臨んでいるのだな、ということは肌で感じ取ることができた。ときには剣呑な雰囲気になっていることもあったが、それも皆の「本気」の表れだったのだろう。また、この学会報の作成なども傍から見ていると楽しそうですらあるが、やはり言い知れぬ苦労があるであろうことは端々から見て取ることができる。

こうして改めて学会の活動に思いを巡らせると、文化財学会の成長の陰に彼らの努力の跡がありありと浮かんでくる。しかし、一般の学生にはどうもその努力が伝わりきっていないようにも思える。私自身はシンポジウムの手伝いや部会活動などを通して比較的学会に近い立場から学会の活動を見ていたと思うが、中には現在の自分の学年の学会

委員が誰なのか把握できていないものもいるようだ。学会委員の選定もどうなっているのかよく分からない部分があり、その辺りから学会と一般学生の間に距離ができてしまっているのではないだろうか。

学会側からも積極的に行動を起こし、文化財学会全体に「自分たち一人一人が文化財学会のメンバーだ」という自覚を呼び起こしてもらえるように努力をすべきであろう。今後、文化財学会をより発展させていくには、やはり学会委員であるか否かに係わらず学会員全体の協力が大切であると思う。

最後になるが、これは委員長個人の意見であり、学会総意の意見ではない事を確認する。

これからの学会に必要な事

3年　高橋　拓也

結論から申し上げると、本来学会を動かすのは、学会員であるみなさんであり、学会委員はあくまでもそれらの会員の代表者でしかない。よって学会員の力なくして、学会は本当の意味で機能しない。そして、会員と委員の相互が、学会を盛り上げて協力していくことで、これからの文化財学会を発展させていかなければいけない。

私は『学会とは、同じ学問を志す仲間が集まって、会員相互の親睦や研究情報を交換する環境を作り出す所』であると考えている。そして、そういった環境を作るため、様々な学会活動の企画・運営に努めてきた。しかしながら今日の学会は、本当の意味で機能していないと言えよう。それは学会において一番の問題となっている、学会委員と学会員の、学会に対する考え方におおきな違いがあることに起因しているからだ。学会では、このことをよく温度差と呼んでいる。委員長という立場から学会全体をみると、この温度差が顕著に見えてくる。そして実は、この温度差は委員同士にも往々にして見られる。

では、この温度差はどうしたら埋まるであろうか。それは一人一人がお互いに歩み寄りながら少しでも学会について考えればよい。どんな理由であろうと、この大学に文化財という学問を志すために入学したのであれば、みなさんにとって、その学問を志す環境が少しでも整っている事に越したことは無い。そしてこの文化財学会はその環境を学生一人一人が作ることが出来る夢のような所である。だからこそ、学会員であるみなさんには少しでもこの文化財学会に関心をよせてもらいたい。そして、少しでもこの温度差を埋めていけるならば、これからの文化財学会は大きく発展していけるだろう。

4年間を振り返って

4年　熊谷　美由紀

文化財の修復という仕事に興味を持ち、この大学に入学してから4年が経とうとしています。自分の好きなものを自分で直したい、1番近い場所でそれに触れたいという実に単純な理由から、ほぼ憧れのみで入学した当時を思い返すと自分は本当に何も知らない人間だったのだと思います。恥ずかしい話ですが、4年前の私にとって文化財とは美術的学術的な価値よりも、私自身の「興味」の対象でしかありませんでした。文化財には過去、確かにそれに関わった人達がいて、文化財に関わることすなわち過去の人達と関わることだと、「物」の背景には必ず「人」がいるのだと、気付いてしまえば当り前のことを4年前の自分は理解していなかったのです。正直に言えば、授業ですら歴史や背景の勉強よりも、とにかく本物に触れたい、そればかりでした。しかし、今そう思わないのは、何も知らなかった自分が、それだけこの4年間で文化財を守り伝えていくということの本質を少しでも学べたからだと言えるでしょう。そして良くも悪くも、文化財が直面している厳しい現実というものを1つ1つの授業から、また先生方のお話を通して肌で理解することが出来ました。

私は卒業と共に、文化財とは直接関係のない仕事へと就職します。印刷業という「人」の手にわたる「物」を作る仕事です。しかし、文化財学科で学んだ「物」を扱うということ、「物」から始まる「人」との繋がりを、自分の肌で理解したそれらを忘れることなく、常に意識して「物」と「人」と関わっていく自分でありたいと思います。そして、社会でそれらを意識する時、自分はこの大学で学んだこと、教えて下さった先生方、私が関わった人達を思い出すでしょう。狭かった視野を広げる機会を与えてくれたこの文化財学科に今、本当に感謝しています。

文化財学会を活性化させよう

4年　山口　悟史

「活動の主体は会員の皆さんであり、それを代表する委員の方々のご努力にまたなくてはなりません」という故石井進先生のお言葉があります(学会報vol. 1を参照)。ここでいう会員とはこの学会報を読んでいる方々に他ならないのですが、この一文から果たして、その主体である我々会員が意欲的に学会へ参加しているのだろうか、という疑問がわいてきました。

それは運営の立場にいる学会委員の力不足の点は否めないのですが、学会員全体が意欲的というよりも、むしろ形式的に参加している感があるように思います。皆さんの多くは、歴史が好きでこの文化財学科に来ていると思いますし、また、それが学科内での共通の興味でもあると思います。その興味の幅を広げ、さらに深める意味でも意欲的に学会へ参加してもらいたいと思います。といっても春季・秋季大会や研究部会への参加が主なことになりますが、「百聞は一見に如かず」の喩え通り、まずは参加してみてください。これらの活動は普段の授業とは違うことが学べ、必ず興味を持つことでしょう。この興味を持つということが大切だと思います。さらに今年度は、研究部会の活性化を目的として「部会連合」が発足し、定期的な会合や活動報告会が行われました。これら活動にも意欲的に参加するべきだと思います。

また文化財学会を盛り上げるために、会員の意見・要望を学会委員に伝えて欲しいのです。そうすることによって会員として、学会に参加している責任が表れてくるのではないでしょうか。学会委員としても、会員が学会に何を望んでいるのかを知ることによって学会を促進させることができます。

学会は会員全員で築き上げていかなければなりません。またその責任もあります。一人一人が会員であるという意識と責任を持ち、より良い文化財学会を築いていきましょう。

学会を支える人たちへ

大学院修士2年　五十嵐　健太

昨年11月15日、秋の学会が会館で行なわれ、鎌倉永福寺跡をテーマとした発表がなされた。私はその時の発表者の一人であり、鶴見大学出身として学会で発表をしたのは私が初ではないだろうか。ということで、緊張したのを覚えている。発表2週間前くらいから、大学院の授業時間をお借りして発表練習をさせて頂いたが、本番4日前になっても内容がまとまらず、先生方に大変なご心配をお掛けしてしまったことを覚えている。また院生の友人達が徹夜で手伝ってくれたおかげもあり、なんとか本番では発表が出来た訳である。今までにない貴重な初体験であった。ここで言うのもなんだが、あの時の発表で意見があるという方は是非院生控え室まで来て頂きたい。そこでゆっくりカテキン茶でも飲んでお話を交わそう。

前置きが長くなり、恐縮である。学会についての意見を述べるという事なので単刀直入に申し上げると、私が気になるのは学会委員の運営に対する意識の低下である。個人的にどうのこうのではなく、委員全体に学会委員としての義務感・責任感の希薄がみられる。委員に選出された以上、当然この二つは付きまとう事になるのであるから、それを自覚した態度で運営をして欲しいのである。しかし、このような状況が改善されなければ、学部生中心の学会運営を考え直すことになるだろう。それでも自分達の手で何とかしたというのであれば、信頼を得られる行動を示す事がこれからの委員会に求められる。

以上、私が最近抱いていた思いである。「学部生だから仕方が無い」と言われない、思わないを目指して欲しい。

研究部会報告

部会連合発足

「部会連合」は2003年７月、各研究部会及び文化財学会全体の活性化を主な目的として発足されました。主な活動としては月１回程度の定期的な会合を通して、各研究部会の活動報告、今後の活動計画の発表、研究部会の今後の方向性などについての討論を行っています。本連合は現在のところ、江戸東京研究部会・鎌倉研究部会・古典芸能研究部会・災害史研究部会・日本精神研究部会・美術工芸研究部会・仏教文化研究部会・歴史考古学研究部会の８部会に学会委員、Webサイト委員会のメンバーを加えて、構成されています。

第一回　部会活動報告会

2003年11月27日に部会連合の一つの試みとして「第一回　部会活動報告会」が行われました。これは各研究部会の活動成果を発表しあう報告会で、目的としては研究部会の活動を一般の学生に知ってもらうためです。今回は７部会による活動報告がなされました。

「江戸東京研究部会」では2003年の主な活動について報告がなされました。２月に『日本の近代化』と題し、品川御台場、江川氏調練場跡、築地軍艦操練所跡、旧新橋停車場跡と品川台場築造を計画した韮山代官・江川太郎左衛門英龍とその門弟の足跡を辿りました。３月には品川区立品川歴史館で開催された、ペリー来航150周年記念企画展『ペルリが来たぞ！』を見学し、その周辺を巡りました。10月には『しながわの大名屋敷を歩く』と題し、品川歴史館の特別展示『見る・読む・掘った　しながわの大名屋敷—お殿さまの別邸生活を探る—』を見学後、土佐藩、越前鯖江藩、仙台藩、熊本藩、松山藩の各大名屋敷遺構を見学しました。11月には『赤穂浪士ツアー』と題し、赤穂浪士が討ち入り当夜に集合した場所（三ヶ所）や吉良邸跡、泉岳寺、熊本藩中屋敷の遺構とその屋敷内にあった17名の切腹地跡など赤穂浪士所縁の地を巡りました。また、報告会後の12月には2003年の締めくくりとして品川台場発祥の地である伊豆韮山への巡検が行われました。

「鎌倉研究部会」では2003年の主な活動について報告がなされました。まず、７月に東京国立博物館特別展『鎌倉禅の源流展』を見学しました。10月には『禅の源流展』に連動して開催された鎌倉国宝館特別展『建長寺—創建750年—』を見学し、その後、近年発見された鎌倉末（元弘から建武年間）作成といわれる浄光明寺絵図の現地を歩き、建物跡の同定を行いました。11月には円覚寺の『風入れ』に赴き、同月の別日には横浜市歴史博物館特別展『鎌倉御家人平子氏の西遷・北遷』を見学しました。平子氏は武蔵国久良岐群平子郷（現横浜市磯子区付近）を本拠とする鎌倉御家人で、ある一地域の武士団が中世をどのように生き抜いていったかという大変有意義な展示がなされていました。また、報告会後の12月には『これ調べるのに何使う？』と題してレポートや論文作成に役立つ資料の収集方法について勉強会が行われました。

「古典芸能研究部会」では、11月に東京成徳大学助教授の青柳隆志先生をお招きし、『装束の取り扱いと着装』題して行われた活動の模様が報告されました。今回は先生のご好意により束帯・直衣・狩衣・水干・十二単の五種類の装束および冠や烏帽子、笏や檜扇などの持ち具、浅沓などをお借りしまして、実際に着装しました。また、装束の雰囲気を更に盛り上げる演出として、菜種油を利用した灯明の実演や間仕切りカーテンのような役割をしていた几帳などの調度品も加わり、あたかも平安時代にタイムスリップしたかのような空間になりました。公家の装束以外では江戸時代の鉄砲隊が着用していた甲冑も先生のご好意によりお借りしまして実際に装着しました。文化財学科の実習ではなかなか扱えない装束というものについて、実体験を通して学ぶことが出来ました。

部会連合メンバー

「災害史研究部会」では、2002年度から2003年度までの活動報告がなされました。2002年11月に国府津の松田断層を、2003年 3 月に神縄断層を見学しました。4 月には国立公文書館で開催された特別展『天地大変—資料に見る江戸時代の災害—』を見学し、同日に開催された講演を聴講しました。また、5 月には横浜市都市発展記念館を、8 月には神奈川県立博物館の特別展『80年目の記憶—関東大震災といま—』を見学しました。同月の別日には『震災遺跡見学会』にて、平塚から茅ケ崎を巡りました。9 月には国立科学博物館の特別展『the 地震展』を見学しました。

「日本精神研究部会」では、『梵字』を今年のテーマに据え、梵字練習帳を購入し、毎週の定期的な活動の中で習字による練習を行いました。報告会では研究の成果として、黒板に梵字の実演を頂きました。また、現在では設立当初から行われている個人研究の成果をまとめた冊子の制作を進めているそうです。今後は梵字を書くだけでなく梵字曼荼羅の研究や作成、梵字に関する場所を巡るフィールドワークなど意欲的な活動方針が提示されました。

「美術工芸研究部会」は、2001年設立時からの計 6 回におよぶ活動の足跡について報告がなされました。2003年の11月には第 6 回として学部の現二年生が企画した、東京国立博物館の特別展『大徳寺聚光院襖絵展』を見学し、報告会後の12月初旬には『襖絵展』についての事後研修を行ない活発な意見交換がなされました。12月末には本学教授の岩橋春樹先生のご指導の元、美術工芸品の取り扱いに関して体験実習を行いました。諸事情により部会員のみの活動となりましたが、少人数による集中した作業は非常に充実したものとなりました。通常の活動としては毎月第一月曜日には集会を開き、個々では作品の制作も行われています。報告会では夜光貝を使っての螺鈿工芸やペンダントなどの作品も紹介されました。

「歴史考古学研究部会」では、勉強会を活動の主軸として考え、巡検はその必要に応じて開催されるべきという方針に基づき、毎週木曜日に行ってきた会合、事前説明会および定期的な勉強会などの成果について報告がなされました。また、それらを踏まえ、今後は「週一回の勉強会の開催」と他の部会との巡検日のバッティングを避けるために月末の土曜日か日曜日を「歴考研の日」とし、巡検日の定着化を目指すという活動方針が提案されました。報告会後の12月には『切通しツアー　極楽寺方面編・中世鎌倉西方の防衛線　～極楽寺坂・大仏坂を中心として～』と題して、他大学の学生と合同で鎌倉の切通しおよびその周辺地域を巡りました。

今回は初めての試みということもあり手探り状態のような内容でしたが、今後はこのような報告会を定期化し、より高度な研究発表会のような形に高めていきたいと考えています。また、部会連合として新たな企画を提案し、そのような企画を通して少しでも研究部会に対して興味と親近感が沸いてきてくれれば幸いです。各研究部会も部会連合もまだ誕生したばかりで発展途上の段階です。今からでも遅くはありません。皆さんも時代の目撃者になってみませんか。そして新たな時代を築こうではありませんか！

尚、各研究部会の活動につきましては文化財学科のホームページをご覧下さい。アクセス方法は下記の通りです。

【アクセス方法】
インターネットの検索サイトで「鶴見大学ホームページ」を検索→『鶴見大学ホームページ』の「大学院の案内」→「文学部」→「文化財学科」→写真（実習IBと思われる）の右下「文化財学科のホームページはこちら」をクリック→「学会」→「研究部会」でお願いします。
http://ccs.tsurumi-u.ac.jp/seminar/bunkazai/frame.htm

（文責　M１　宮﨑　正二）

部会連合定期会合にて

卒業論文一覧

指導教授：石田　千尋

・飯塚　拓巳　「土佐勤王党の獄中闘争について」
・石川　晃野　「司馬江漢の実像をめぐって」
・尾﨑　正浩　「近世城郭に関する一考察—築城時の名古屋城について—」
・友部　温子　「西洋人と幕末日本—ヘボンと岸田吟香をめぐって—」
・山口　悟史　「近世初期における藩農政と農民—米沢藩を事例として—」
・和田　大輔　「近世後期における対外危機と国際関係—フェートン号事件をめぐっての一考察—」

指導教授：岩橋　春樹

・池上　景子　「絵画と生活空間の関係」
・熊谷美由紀　「日本アールデコと山六郎、山名文夫の功績」
・鈴木　郷子　「歌川広重の風景版画の構成」
・関　宗一郎　「高橋由一『鮭』におけるその表現力」
・那須　恵　「河鍋暁斎の観世音菩薩の意義」
・松田　幸子　「神田日勝の芸術」
・松本　悠志　「青不動の炎に関する三つの考察」
・吉田　史子　「近代日本における挿絵の変容」

指導教授：大三輪　龍彦

・鮎澤　佳美　「中世公家日記にみる経済活動—頼母子を中心に—」
・岡村　悠史　「日本における鬼について」
・小田　雅美　「中世女性の権利と義務について」
・円谷和香子　「仏教における女性観—性差別を中心に—」
・戸賀瀬　祐　「中世東北の俘囚について」
・中島　典子　「中世の化粧と化粧道具について」
・蓮池　美緒　「木造彫刻の像内納入品について—中世を中心に—」
・村石　恵美　「熊野参詣曼荼羅について」
・村上奈津美　「中世における武家儀礼について」
・森下　春香　「源頼朝と房総半島—源平闘諍録にみる頼朝の動向—」
・吉田　貴子　「五輪塔について」

指導教授：河野　眞知郎

・新井　涼子　「絵巻にみる飲食具考—酒宴場面を中心に—」
・長壁　由佳　「前方後円墳の設計規格について」
・金杉　信宏　「石槍の研究」
・黒木　涼子　「縄文時代における農耕の可能性」
・品川　衞　「卜骨について」
・清水　真澄　「弥生墳丘墓と出現期古墳」
・冨田誠一郎　「配石遺構の機能と象徴性」
・平井　充　「方形周溝墓の研究史と現状」
・星野　重光　「縄文時代の方位の観念について」
・山口　陽　「弥生・古墳時代の親族構造について—古人骨の科学的分析を中心に—」
・渡邉　朋子　「元・明染付皿から伊万里への文様展開」

指導教授：関　幸彦

・伊藤　達也　「平安貴族における男色の一考察」
・加藤亜友美　「中世の流罪—『吾妻鏡』を中心に—」
・篠原　猛彦　「御成敗式目における刑罰の諸問題」

・塚本　賢一　「切腹に関する一考察」
・辻　　将人　「源頼朝の人間像」
・中込　健司　「後北条氏における軍役の諸相」
・堀内　由香　「『吾妻鏡』における陰陽道祭儀の分析」
・松井美知瑠　「巴御前伝説考」
・涌井　愛　「北条義時論」

指導教授：中里　壽克
・浅田　高士　「古代中国漆器の研究―漆器に使われた文様の考察と技法の復元―」
・三枝　愛子　「漆皮の復元に関する技法的研究」
・白井　伸樹　「日本の箱、その形態・様式・技法の変遷―仁和寺蔵宝相華蒔絵宝珠箱を中心に―」
・武部　純代　「正倉院の螺鈿とその技法と歴史についての研究」
・野口　正樹　「琉球漆器の研究―堆彩漆の技法研究と復元―」
・茂原あゆみ　「鎌倉彫の歴史的考察」

指導教授：永田　勝久
・石山　若菜　「日本画顔料の固着について」
・内堀　裕美　「色漆の色調変化について」
・大川　匠　「漆塗膜の劣化について」
・沖田栄里子　「石の材質と強化剤について」
・塚本　直里　「浄智寺下遺跡　出土銭貨に関する基礎研究（2）」
・長久　裕子　「絹繊維の劣化に及ぼす温湿度の影響」
・二木　里志　「和紙の劣化条件について」
・福田久美子　「ドウサ引きを行った和紙の劣化について」
・藤枝　朋子　「繊維の劣化と染料」
・松井　輝夫　「出土木製品の保存処理―含浸処理剤について―」

修士論文一覧

指導教授：石田　千尋
・冨川　武史　「幕末期における江戸湾防備について」

指導教授：関　幸彦
・石塚　賢治　「鎌倉時代における庭中の諸相」
・野田　知宏　「鎌倉への雅楽伝播について―地下楽人の動向をもとに―」

指導教授：永田　勝久
・木村　文香　「焼付け漆の接着性について―表面処理の効果―」
・鈴村真理子　「中世鎌倉出土漆器の赤色顔料について」

【卒業生会員について】

文化財学会は、鶴見大学を巣立ち、各地で活躍する卒業生の情報交換の、親睦の場、在校生との交流の場として活用していただきたく、卒業生会員の制度を設けています。

会員になるためには、卒業時に会員の登録を行い、合わせて5年間の会費、5千円を納入して頂きます。5年間、会員の皆様には、総会・講演会・シンポジウム等のイベント情報、会報、さらに将来は会誌等を郵送いたします。6年目からは、年会費を振り込んでいただきますが、もし手違いで未納の場合も3年間は、情報の提供をいたします。3年間、会費未納の場合は継続の意志がないものとして、自動的に退会の手続きを取らせて頂きます。

また、住所変更等につきましては、学会宛に御一報下さい。この変更は、文化財学科のホームページ上でも受け付けます。

卒業生の皆様の御入会と、今後文化財学会を広くサポートしていただけることを御願い申し上げます。

4　親睦その他の事業

6．本会に次の役員を置く。

1　会長（1名）は学科長に委任し、本会を代表し会務を統括する。

2　委員（若干名）。委員は諸事業の企画運営にたずさわり、会員間それぞれで互選する。任期は一年とし留任を妨げない。

7．本会の経費は会費（年額千円）、寄付金その他の収入をもってこれに当てる。

8．本会は事務所を鶴見大学文化財学科合同研究室に置く。

付　平成11年10月16日から発足する。

平成16年度の年間行事予定

文化財学会総会及び春季大会

日　時　6月5日（土）
　　総会（午後1時から）
　　講演会（午後3時から）

会　場　鶴見大学会館メインホール

講演者　近藤好和氏
　　「弓矢・太刀・甲冑の世界」

総持学園創立80周年記念
　　文化財学会秋季シンポジウム

日　時　11月13日（土）午前11時から(予定)

会　場　鶴見大学会館メインホール

テーマ　「鎌倉遺跡をめぐる諸問題」(仮)

鶴見大学文化財学会会則

1．本会は鶴見大学文化財学会と称する。

2．本会は鶴見大学文化財学科教職員・学生および卒業生、その他の関係者をもって組織する。

3．本会は文化財にかかわる人文・自然諸科学の学問交流を活発化し、会員相互の研究を推進し、かつ親睦はかることを目的とする。

4．本会は総会を毎年一回開く。ただし必要に応じて随時会長がこれを招集することができる。

5．本会はその目的を達成するために次の事業を行う。

1　研究等の発表

2　講演会の開催

3　会誌・会報等の編集刊行

編集後記

私たち1年生にとって、学会委員の一員になってあっという間の1年間でした。学会とは何かをよく理解していないまま、春季大会の準備に取り掛かり、先生や先輩にご迷惑をかけてしまいました。しかし、そんな私たちを一からいろいろとご指導くださったお陰で、なんとか1年の活動を終えることができました。学生が主体となっているだけあって、一つ一つの仕事の重さや、運営の難しさを痛感しました。自ら動けなかったことが反省点として挙げられますが、この反省点を今後の改善課題として、学会委員としての仕事を覚えていきたいです。学会委員として過ごしたこの1年は、私たちにとって大いに学ぶ日々でした。1年間本当にありがとうございました。

（編集委員）